

逆転の構図

Great Expectations にみる病と癒し

西垣 佐理

はじめに

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の小説には『リトル・ドリット』 (*Little Dorrit*, 1855-57) のアーサー・クレナムや『互いの友』 (*Our Mutual Friend*, 1865-66) におけるユージーン・レイバーンなど、自らの精神の安定と癒しを求める男性たちが数多く登場するが、その時の癒し手は通常エイミ・ドリットやリジー・ヘクサムといった女性たちが担っている。ところが『大いなる遺産』 (*Great Expectations*, 1860-61) において、主人公のピップ (Pip) が熱病に倒れたとき、彼を看護したのはエステラでもビディでもなく、彼の義理の兄ジョー・ガジャリ (Joe Gargery) だった。ピップの看護人が男性だったという点には注目すべきものがある。それは女性が看護 (nursing) するのが当然とされていた時代に、男女の役割が「逆転」して男性による看護が入り込んでいることを示唆するからである。またピップ自身も物語において癒し手としての役割を果たしている。これは、ヴィクトリア朝の既成概念から考えると通常とは異なった意義を持っていると言えるのではないだろうか。また男性の看護は作品にどのような影響を及ぼしたのか。そこで本論では、男性の看護を中心に見た病と癒し、そしてそれによって生じた逆転の構図とその意義について考えていくことにしたい。

『大いなる遺産』の主題がピップの成長とアイデンティティ獲得であるのは言うまでもないことだが、その際重要なシーンとしてピップが失意と借金のうちに熱病に倒れる場面がある。まずそのシーンを見ていくことにしよう。

私の容態が最悪の状態を脱してから、私は周囲の他の人物の顔は次々変化するのに、一つの顔だけは全然変わらない、ということに気づきはじめた。次第に、私の周りにやってくる人物の顔は、みなジョーの顔に変わるのだった。夜、ふっと目を覚ますと、ベッドのそばの大きな椅子にジョーがかけていた。昼間目を開くと、日除けをおろし、開け放しにしてある窓のそばに腰掛けてパイプをくゆらせているジョーが見えた。私が冷たいものを飲みたいというと、すぐにそれを渡してくれるのは懐かしいジョーの手だった。私が飲み終わって枕に頭をうずめると、私の顔を優しく、そして嬉しそうにのぞき込むのもジョーの顔だった¹⁾。

この場面に関して、マイケル・ウィーラー (Michael Wheeler) は「自分のアイデンティティを喪失し、病気の時に子供時代の状態へ帰っていった間にピップは生まれ変わったのであり、彼の個人的な人生と世間に対する理解という両面において彼は再び生きはじめなければならない」と指摘している²⁾。このように主人公が病に倒れ、その回復がアイデンティティの再生や確定と二重映しになっている重要な場面において、看護を行う人物がジョーという男性であるのは非常に注目すべきことである。というのも、彼の存在がピップの再生されるアイデンティティの造型に大きな影響を与えずにはおかないからである。元々彼は「穏やかで、人が良く、気がやさしく、のんきで愚かだが愛すべき男 - ヘラクレスのような強さと、そして弱さも持ちあわせていた」(40) という描写にも明らかなように、ナースとして機能するのに必要な優しさと、それに似合わぬ頑強な体格をもった男性とし

て描かれている。だが、ディケンズ自身が書いた『大いなる遺産』の覚書に、以下のような文言が記されている。

Pip arrested when too ill to be moved lies in the
Chambers in Fever. Ministering Angel Joe. (495)

これをみると、ジョーの部分に3重線が施されている。つまり、ディケンズは最初から彼をピップのナース役として意図していたのである。彼の精神は作品中でも「天使の翼の羽ばたき」(108)とあって、まさに「癒しの天使」(Ministering Angel)としての役割を果たしている。またピップもナースとして振舞っているふしがある。例えば彼はミス・ハヴィシャム (Miss Havisham) の遊び相手としてサティス・ハウス (Satis House) に招かれるが、そこで行っているのは彼女の話し相手をしたり、部屋で歩かせるといったようなことである。また、遺産の真の恩恵者エイベル・マグウィッチ (Abel Magwitch) を看病し、その死を看取ったのもピップであって、これも一種の nursing であると言えよう。彼らのこのような性質は本来女性が果たす役割であり、その意味において男性がその役割を果たすのは、身内だからという理由があるにせよいささか奇異に映る。更にディケンズの他の作品においても、例えば『ピクウィック・ペイパーズ』 (*Pickwick Papers*, 1836-37) のサム・ウェラーや『マーティン・チャズルウィット』 (*Martin Chuzzlewit*, 1843-44) のマーク・タプリーといった男性たちが自分達の主人の看護を行っているのである。なぜディケンズは彼らに看護を行わせたのだろうか。

ここで男性による看護について考えるために、作品世界における「病」と「癒し」とはどのような意味をもつのかを見ていくことにしよう。この作品には肉体的な病、精神的病、物語に比喩的に語られる社会的病が存在しているが、とりわけ社会の病とは、社会的・文化的秩序が混乱し收拾がつかない状況を指す。したがって、癒しとは単に病気の治癒を意味するのみならず、混乱・腐敗した社会的秩序を回復・安定させるという意味をも含むことになる。ヴィクトリア朝の父権制社会における規範に則って考えると、それは社会的・文

化的役割としての男女の性的分業を固定させることに他ならないと言えるであろう。ディケンズの小説において、個人の病はしばしば社会的病のメタファーとなっている場合があり、それを癒すのが通例女性なのは、男性原理の破綻を指摘しそれを補うものだからである。したがってここで用いる nursing という言葉には、単に病人を看護するという意味だけではなくて、比喩的に人を癒すという意味をも含むことになる。これらの前提を踏まえ、男性の看護がこの作品に及ぼした意義について考えていきたい。

ジョーやピップの看護には大事な点が2つある。まず第1点は、彼らの看護はヴィクトリア朝のジェンダーイデオロギーによる性的分業の配置を逆転しているということ、そして第2点はこの逆転が実はもう一つの逆転、すなわち人間関係における男女の優劣関係の逆転を元に戻すための試みだということである。男性の看護がなぜジェンダーの逆転につながるのかというと、それがヴィクトリア朝社会のイデオロギーを支える重要な柱の一つが男女の性分業のコンベンションに抵触するからである。元々看護は女性が行うものという認識がある。これは“nurse”という言葉の語源「栄養を与える・授乳する」を見ても明らかである³⁾。男女の活動領域がきっちり二分化されていたヴィクトリア朝の社会規範から見ても、女性はいわゆる「家庭の天使」であって看護は女性の職分とされている。例えばメアリー・プーヴィー (Mary Poovey) は「女性の看護はもっとも初期の近代組織の時代から、男性に対して支えとなり従属的な関係であることを誇らしげに主張した職業であった」と述べている⁴⁾。それは、キャサリン・ジュッド (Catherine Judd) も指摘するように、女性の看護には階級とジェンダーにおける逆転現象がみられるが、その中にはヴィクトリア朝中期の看護婦達を取り巻く熱心さとカリスマ性が示されているからである⁵⁾。また当時の文献に目を通すと、ディケンズが編集した雑誌『家庭の言葉』 (*Household Words*) や『一年中』 (*All the Year Round*) にも職業としてのナースに関する記事が何度か掲載されているが、これらの記事もナースは女性を対象にしている⁶⁾。とりわけ『一年中』に掲載された「病床での試み」 (“*Bedside Experiments*”) という記事において、看護は「(女性の) 才能であり、科学ではない。それは天から与えられた贈り物であり、獲得するものではない」のであり、更には「看護婦は健全な世界にとって宝物である」とさえ書かれてい

る⁷⁾。この記事では、看護人に「彼女」という代名詞が使われていることから、男性の看護は考えられていなかったと言える。

これらを見ても明らかなように、女性の看護はヴィクトリア朝の社会規範として当然のように語られ、文学作品にも多々登場しそれだけで一つのコンベンションとなっている程で、その結果として、男性による看護の場面は非常に少ない。それだけにピップを看護するジョーという構図は注目に値するのである。それは女性の看護に関する資料がかなり存在するにもかかわらず、男性のそれはほとんど見当たらないことから明らかであろう。つまり、当時の性分業イデオロギーの体系においては、男性が看護を行うのは女性が介入できない状態 例えば戦争など で例外的に許されたことであって、それ以外の場合においては男性が女性の領域を侵して看護することは許されていなかったと言えるのかもしれない。こうして最終的には同じ癒し手でも、男性は医者という主導的な立場、女性はナースとして医者に従属的な立場をとるといった性別による分業がますます確立していくことになった。したがって、文学作品に男性の看護が登場するのは、必然的に女性がいない状況においてということになったわけである。

ところが『大いなる遺産』においてはその規範構造が崩れている。それは女性が周囲に存在しているにもかかわらず、ジョーがピップの看護を行い、更にはピップもミス・ハヴィシャムやエステラの癒し手となっているからなのである。なぜこのような現象がおきたのだろうか。そこで先に挙げた2点目の意義について考えてみよう。

『大いなる遺産』は逆転の構図によって、一見性的分業に支えられたヴィクトリア朝のジェンダーイデオロギーを覆しているように見える。しかしこの「逆転」は、実はもう一つの「逆転」を修復し、男性優位の状況を取り戻そうという試みでもあった。その「逆転」とは、この物語の最初からみられる女性たちによる男性の支配のことである。この作品における男女の力関係、とりわけピップを取り巻く主要人物間の力関係は最初から逆転している。例えば、ピップに「くすぐり棒」(41)を使って暴力を振るうミセス・ジョー (Mrs. Joe) と、それを止めることができないジョーという夫婦間の力関係に見ることができる。また、ミス・ハヴィシャムとピップの関係は、階級的な上下関係もさることながら遺産の恩恵者

と相続人という思い込みの関係が生じ、それゆえにピップは彼女に対して常に従属的な立場にあった。ミス・ハヴィシャムの彼に対する数々の言動がいかなるものであれ、彼が逆らうことはできなかつたところにも、二人の力関係が強く表れている。更にエステラ (Estella) との関係において、ピップは彼女が放った侮蔑の言葉によって魂に傷を負い、紳士になった後でさえも彼女と会う度に惨めな思いをしている。他にもマグウィッチとモリーの力関係においては、ジャガーズ (Mr. Jaggars) がモリー (Molly) の腕の強さを示すことによって、彼女の力がマグウィッチよりも勝っていたということは想像するに難くない。要するに、これらの女性たちに対して男性たちはいずれも劣勢に立たされているのである。

このような状況ができあがった背景を知るために、この作品における女性のあり方について考えなければならない。『大いなる遺産』における女性達、とりわけミセス・ジョー、ミス・ハヴィシャム、エステラといった女性達は、様々な形で自由に自己表現しようと試みている。但し彼女たちの取り組みは、家庭の幸福といったものから常に引き離されたものであり、それゆえ彼女たちに葛藤が生じ、心理的に抑圧されてしまっている。そんな彼女たちの抑圧された心理が生み出したものがジェンダーの逆転という構図であった。その構図のなかで、彼女たちはそれぞれ異なったやり方で男性より優位にたとうと試みた。例えばミセス・ジョーは家庭において主婦業はこなしているが、常に自分の人生に対して欲求不満を抱え、そのため家庭内で「天下を取っている」(79) 状態になった。ミス・ハヴィシャムは、婚約者に裏切られて正気を失い、「破れた心臓」(88)を抱えたまま時計の針と共に女性としての人生の針も止めてしまったがゆえに男性への復讐を誓い、莫大な財産とエステラの存在を背景に一族の男性やピップに対して優位を保とうとした。そしてエステラはミス・ハヴィシャムに「氷の心」を入れられ、「心がない」(259) 状態にされ、その結果自我をもつことなくただ彼女自身の持つ美貌をもって男性を翻弄しつづけることとなったのである。

彼女たちの行動は、この作品唯一の「家庭の天使」ビディ (Biddy) の姿とはおよそかけ離れている。ビディと対比することによっても明らかなように、彼女らの生み出した構図

は家庭の平和を一義とする作家ディケンズにとって「病んでいる」状態であった。つまり、彼女たちはヴィクトリア朝社会の求めた女性本来の役割を果たしておらず、それゆえにこの物語に不自然な関係を作り上げるといふ、ある種の「病」を生み出したと言えるのかもしれない。このような「不自然な」関係を覆すため、また「病んでいる」女性たちを癒すための方策が男性による「癒し」だったと言えるのではないだろうか。それは本来男性に委ねられるべき支配する力をいびつな形で篡奪したがために女性たちは「病んでいる」状態に陥り、したがって男性が立場を逆転して看護せざるを得ない状況となったということなのである。言い換えれば、この小説では本来女性の領域とされた看護を男性が行うのは「病んでいる」女性たちを癒すことによって、一度作り上げられた女性優位という「逆転」関係を覆し、社会の規範に則った秩序に戻そうと試みたからではないであろうか。

II

それでは、先に述べた「逆転」の構図が男性の看護によっていかに覆されるのかをこれから具体的に考えていきたい。だが、まずピップ自身の癒し、そして彼が行った看護を見ていく必要がある。というのも、彼自身も社会の求める役割を果たせず一種の病に冒されていたからなのである。ピップは、自分の心の痛手を階級の向上によって自らの傷を癒し、更にはそれまで女性に支配されて逆転していた力関係をも覆そうと試みた。だが、金銭による癒しは彼の精神を決して安定させることはなく、むしろ俗物化させたのである。そんなピップにとって一番の癒しは、女性の愛情ではなくジョーとの「友情」からなる慰めであったのだ。すべてを失ってからのピップがジョーの手厚い看護を受けた時、彼は次のように述懐する。

私が元気を回復するには相当時間がかかったが、私はゆっくりとではあるが着実に元気を取り戻していった。その間、ジョーは私のそばについてくれた。私

には自分が昔の幼いピップにまた立ち返ったように思えた。

というのは、ジョーの看護ぶりはまことに素晴らしく、かゆいところに手が届くと言ってよく、私は彼から子供扱いにされていたからである。彼は昔、内緒話をしたときのようにして座って私に話しかけてくれた。その様子は昔と同じく素朴で、昔と同じく控えめで、私をかばうような調子だったので、あの懐かしい台所で送った日々以後の年月は、今は消え去った高熱が引き起こした精神障害の中の悪夢の一つにすぎなかった。(476)

ここでもウィーラーは「彼が熱病から脱して「懐かしい家庭の声」を聞くとき、ピップは「彼(ジョー)の手の中にいる子供のように」なり、そして彼は大人の自己に戻り、再びジョーに「サー」と呼びかけられるけれど、ジョーのアイデンティティが彼の頼れるただ一つのアイデンティティであると発見することで、彼は(それまでとは)異なった人間になるのである」(Wheeler 102)と言う。つまり、ピップはジョーの看護によって幸せだった幼少時代、彼らの関係が最も親密だった頃へと帰っていくことで再び自己を取り戻し、昔から培われてきた「友情」を復活させ、その結果彼は新たな視点を持って社会へと入っていくのが可能になったのである。

ところでピップの病がジョーという男性の癒しによってしか克服できないものであったというのは非常に大切なことである。それは、ピップが女性から愛情を受けて育てはならず、はからずもジョーが母親代わりをしているようなところがあったからである。ある点においてピップは少し通常とは違った女性観を抱いていたとしても不思議はない。というのも、ピップは第8章で自らが言うように姉の「手塩にかけた」(39) 養育、それは授乳を伴わない文字通りの手で育てられた養育でもあるのだが、そのおかげで神経質な子供に育ったという確信を持っている。彼が気の弱い子供としてミス・ハヴィシャムやエステラに軽蔑されても泣くことしかできなかった時点から既に、男女の力関係における逆転現象は始まっていたのである。それゆえ、彼は愛するエステラに対して自分らしさを発揮できず「粗野で下品な子供」(256) なのだというコンプレックスを抱え、自分に自信を持つこ

とができないでいたのだ。キャロル・クライスト (Carol Christ) は「男性らしさ」(masculinity) がヴィクトリア朝では重要視されているにもかかわらず当の男性たちはそれを発揮できないでいると指摘している⁸⁾。言いかえれば、ヴィクトリア朝の男性たちは、自分たちのアイデンティティを獲得できず、社会の規範に則って「男性らしく」振舞えないというコンプレックスをもっていたのではないだろうか。そのような観点から考えると、ピップに女性の看護よりもジョーによる癒しが重要だったのは、金銭によって決裂してしまった親子関係を修復すると同時に、ジョーが男同士の友情という名のもとにピップがもっとも自分らしさを発揮できる相手だったからに他ならない。つまり、第2章に登場する「受難者(患者)仲間」(40)という言葉に見られるように、彼らは傷つけられた患者たちで、常に互いを慰めあうことで傷を癒してきたのである。

このような「互いの慰め」というテーマは、物語全体を通して言える。そして、この互いの慰めこそがピップの行う看護なのである。それはマグウィッチ、ミス・ハヴィシャムそしてエステラとの関係に見出せる。まずマグウィッチとピップの関係は、最初の出会い囚人と鍛冶屋の小僧から遺産の恩恵者とその相続人、更には傷ついた老人と看護人というように、常に互いの立場と力関係が逆転しあっている。そしてその都度、ピップは自覚していなかったけれどもマグウィッチの荒んだ魂を癒していた。ピップの方もエステラの父親であるマグウィッチに彼女に対する愛情を吐露することで失恋の痛手を癒したのだ。また、ミス・ハヴィシャムは結婚詐欺にあって正気を失い、彼女の心の内にある男性たちへの復讐の思いで病的になり、そのせいでピップはずっと苦しめられてきた。しかし、第49章で彼女がピップの前で跪き許しを乞いながら自分の行った行為に対して「何てことをしたのだ!」(411)と慟哭するとき、ピップは次のように彼女を見るようになる。

それからまた、彼女が太陽の光を閉め出したことによって、同時に計り知れないほど多くのものを閉め出す結果を招いたということも、また1人身を隠すことによって、幾千もの天の与えてくれた、身の傷をも癒してくれる力を退けてしまうに至ったということ、また造物主が定めた自然の道に背くすべての人間の常とし

て、必ずそうなり、またならねばならず、またそうなるであろうように、次第に病的になってしまったことなどが、私にはよく理解できたのだ。(411)

ピップはハヴィシャムに対して憐れみと同情の念で見ることができるようになって始めて、それまでの力関係から逆転して彼が優位に立ち、彼女に「許しと癒し」を与える存在となることが可能になった。それは、二人がエステラを失ったということで共通の傷を持ち、それで慰めあっていうということでもあったのである。

そして、彼は「愛情と友情」でエステラを間接的に癒したと言える。エステラは彼女自身が言うように感情を持たず、常にハヴィシャムの指示と彼女自身の気まぐれでピップを翻弄する。ところがピップは自分を軽蔑していたエステラを、彼女の出生の秘密を知った後でさえも愛しつづける。それは、彼女の出自が自分と同じような境遇であったと知ることによって、それまで彼女との間にあった力関係が覆されたからだと言えるのかもしれない。結婚後、夫の暴力によってすっかり変わってしまったエステラは、ラスト・シーンでピップに次のように言う。

「だけどあの時、あなた仰ったでしょう」とエステラは非常に熱を込めて言った。「『神様が、あなたを祝福してくださいますように！あなたを許してくださいますように！』って。あなたは、この言葉をあの時に言えたのだから、今他のいろんな教えよりも、私が実際に味わった悩みによって、昔のあなたの本当の心が理解できている今、同じことを言えないってことはないでしょう？私は曲げられて打ち壊されたの—でも、多分以前より少しはいい形になったと思うの。だからね、昔のように、思いやり深く優しくして下さい、そして私たちは今でも友達だって仰ってください」(493)

エステラがつらい経験を重ねてかつての氷のような心をとかしたとき、彼女はピップに対して始めて共感を抱くことができるようになった。ピップは彼女との友情を勝ち得ること

によって、はじめて規範に則った関係に到達できたのだ。このようにピップの行う看護はひとまず成功であり、とりわけ「病んだ」女性たちに対して有効であったと言える。

ところでジョー自身についても考えてみると次のように言える。まずミセス・ジョーが死に際してジョーとピップに許しを乞うことでそれまで逆転していた夫婦の力関係は覆された。そしてピップの看護によって逆転していた親子関係が元の状態に戻った。更にビディとの結婚によって、男女の「不自然な」力関係が元の「健全な」社会規範に戻ったのである。このようにジョーの看護はピップを癒し、ピップは病んでいた女性たちを癒すことで、それまで逆転していた男女の力関係が覆され、結果として彼らは父権制社会の一員として迎え入れられた。それは男性の看護が、自分たちの masculinity 回復をも意味しているということでもあるのだ。

結び

『大いなる遺産』はヴィクトリア朝のエトスを逆転しようとした物語であると言える。そのなかで男性による看護についてまとめてみると、次のように言えるだろう。すなわち、男性の看護は男女の性分業の逆転を示唆する一方で、もう一つの逆転の意図が込められていた、つまり男性に対する女性の優位という不健康な構図を修復する、その意味で父権制社会との結託を促すものであるという両義的な意義があったのではないかということである。おりしも、物語の連載が始まった1860年にフローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) が看護学校を設立、女性の社会進出が公になる時代がやって来ていた。その観点から考えると、ディケンズがこれまでの物語の流れに逆らって、ジェンダーや階級に代表されるあらゆる価値構造を逆転させようとしたというのは十分に考えられる。ただそれが最後になって家父長制の回復という形で読者に迎合せざるを得なかったのは、ひとえに男性の看護による癒しが、物語上では成功を収めてはいるものの、結局のところ女性が介入できないゆえのやむをえない行為としてとどまっていたからではないで

あろうか。

女性の看護が家庭のイデオロギー上の「義務」(duty)から、女性の自立の一手段として社会的に公認された「職業」(profession)へとかわった時、男性の癒しは社会的意義のない行為、そしてともすれば危険な香りのする行動と映ったのかもしれない。それは社会のイデオロギーが要求する「男性性」(masculinity)の問題とも無縁ではない。今でこそ、看護師という存在が男性の職業として登場しているが、看護は母性的なものという認識が強固だった当時、男性の看護は読者の望んだことではなかった。ディケンズは、少し時機尚早の観がある時代に男性の行う看護を考えていたのかもしれない。だがこの作品に男性による看護の場面が登場したことで、物語の展開はこれまでの男性が支配し女性が従属的に家庭を守るといったコンベンションから大きく逸脱し、結果として男女の性分業イデオロギーの「逆転」という構図を作り上げることになったのだと言えるだろう。

*本稿はディケンズフェロウシップ1999年度春季大会(1999年6月5日 於・中京大学)で口頭発表したものに加筆・修正を施したものである。

註

- 1) Charles Dickens, *Great Expectations* (London: Penguin, 1985) 472. 以下本文中にページ数を記す。尚、日本語訳は日高八郎訳『大いなる遺産』(東京:中央公論社, 1993)を用い、一部修正を加えたものであることを付記しておく。
- 2) Michael Wheeler, *English Fiction of the Victorian Period 1830-1890* (London and New York: Longman, 1985) 102.
- 3) *OED*によれば“nurse”は“nurture”「栄養を与える」から派生した言葉だとしている。
- 4) Mary Poovey, *Uneven Development: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England* (Chicago: Univ. of Chicago, 1988) 166.

- 5) Catherine Judd, *Bedside Seductions: Nursing and the Victorian Imagination, 1830-1880* (Basinstroke: Macmillan, 1998) 6.
- 6) 『家庭の言葉』には “Hospitals” (15 December 1855) や “The Nurse in Leading Strings” (12 June 1858) と nursing に関する記事が 2 度掲載されている。これらはいずれも看護婦に対する改善の要求とフローレンス・ナイティンゲールの看護改革に関する記事であり、社会的存在としての看護婦に対する当時の関心の高さがうかがわれる。
- 7) “Bedside Experiments,” *All the Year Round: A Weekly Journal*, 31 March 1860 (London: No. 11, Wellington Street North, 1859) Vol. 1, 537.
- 8) Carol Christ, “Victorian Masculinity and the Angel in the House,” *A Widening Sphere: Changing Roles of Victorian Women*, ed. Martha Vicinus (Bloomington: Indiana UP, 1977) 160.

出典：『関西学院大学英米文学』 第44巻 第1号 (2000年2月25日) pp.161-174.